



祭祀と成川式土器

中村直子

集落遺跡から出土する土器の出土状況は、ほとんど廃棄によるものであると言える。成川式土器は多くの場合、集落内の溝や竪穴建物跡（いわゆる竪穴住居跡）の窪地が廃棄場所になっている。土器を日々研究する者としては、1軒あたりどのくらいの量や種類の土器を使用していたかを知りたいのだが、住居跡を発掘しても、住居内に収納されていた土器を発見できるわけではない。住居が廃棄される時には、家財道具のほとんどが持ち出されているからである。

しかしごく少量ではあるが、床面に残された土器を見つけることができる。これらの土器をよくよく観察すると、破片となってしまうものが多く、器としての土器本来の機能を失っているものがほとんどである。ただ、複数の遺跡や遺構間で器種や部位に共通点があり、また意図的に土器片を配置したと考えられる事例が見受けられることから、単なる偶然でその土器が残されたとは考えにくい。食べ物を煮炊きしたり、水を貯めたり、食物を盛るといった、日常的な土器の使い方とは異なっているが、複数の類似する事例が発見されるということは、これらが個人の単なる思いつきの結果残されたものではなく、成川式土器を使用する集団の全体か一部が保有する慣習の結果であると言えるだろう。また、壊れた土器をリサイクルして日常生活の道具としたと考えるには、いささか奇妙なものが多く、祈りや占いなどの祭祀儀礼の結果残されたものと推定される。

そのほか祭祀具としては、ミニチュア土器や杓子状土製品も存在している。これらも、集落遺跡やその周辺から出土する遺物である。ここでは、集落遺跡でみられる成川式土器を伴う祭祀的遺構や土製品などについて、代表的なものを紹介したい。

1 すまいに関係する遺構

南九州古墳時代の住居を含めた建物跡のほとんどが竪穴建物跡で、竈は導入されず炉が継続する。ここで紹介するのは、竪穴建物跡の床面や柱穴に残されたものと、住居跡内ではないが、居住域内と推定される遺構の事例である¹⁾。その様相は、東原式段階（古墳時代前期）と辻堂原式・笹貫式段階（中期以降）で異なっているため、2時期に分けて紹介する。

1) 東原式段階の事例

鹿児島市武遺跡の複数の住居跡（佐々木他 2004, 田中他 2004, 弥栄 2003）や鹿児島大学構内遺跡郡元団地²⁾の住居跡 93-6-SK14（中村 2001）において、床面やピット上面で検出された甕に共通した特徴が認められる。

出土した甕はいずれも完形品に近いが、脚台がないという特徴を持っている。残存状況がよいため、意図的に脚台のみ除外されたと考えられる。検出された土器片は、さらに破砕されて置かれている場合（鹿大遺跡、図2）と、埋土の土圧で潰れてはいるものの、意図的破砕が認められないもの（武遺跡）の2種類があり、現在のところ、この特徴は遺跡間の差異となっている。また、鹿児島市のみで確認されているため、比較的限定された地域のものである可能性もある。

2) 辻堂原式・笹貫式段階の事例

この時期の事例としては、複数の土器片が組み合わされているものと、完形品もしくはそれに近い罎などの飲用器が単独で床面から検出されるという2パターンが認められるが、両者の特徴を合わせ持つ遺構も存在している。

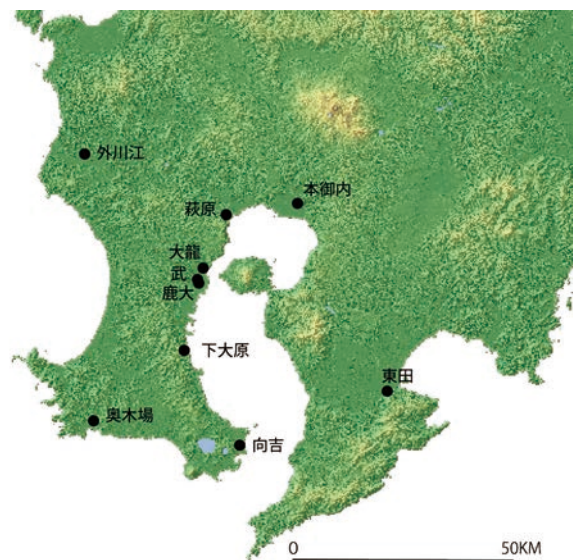


図1 関連する遺跡の位置

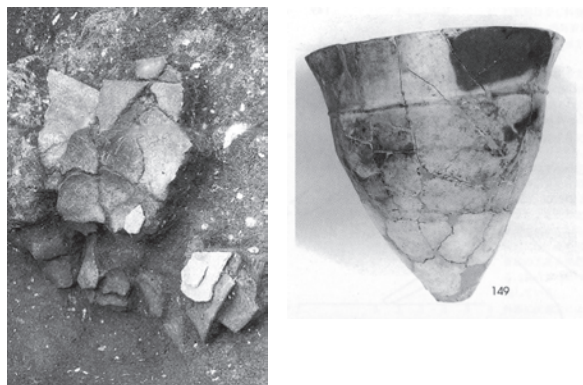


図2 鹿大遺跡 93-6-SK14 土器出土状況と出土した東原式甕

① 複数の土器片が組み合わされているもの

鹿大遺跡や始良市萩原遺跡（青崎 1996）、肝付町東田遺跡（青崎 1980）などで検出されている。検出される場所は、住居床面や柱穴内、住居跡群周辺部などである。

鹿大遺跡では、高杯の脚部と台付鉢の脚台の脚端部を合わせてカプセル状にし、床面に横置きしたものが検出されているが（図3左写真）、同様な二つの脚台片を合わせて横置きにする事例は大隅半島東田遺跡にも1例ある。どちらの例も、二つの土器を合わせている脚端部の径がほぼ同じ大きさであり、大きさが合うものを選んで選んでいることがわかる。

同じく鹿大遺跡では、住居床面に正置された壺口縁部や倒立させた甕脚部など筒状の破片が単独で残されている事例もある（図3右写真）。筒状の破片であることから、器台のように何かを乗せる道具として転用されるなど、この事例については、住居使用時に置かれた可能性も考えておきたい。

萩原遺跡の2基の住居跡では、甕脚部と高杯脚部を柱穴内や床面上に重ね上げ、最上部に罎や甕が置かれた遺



図3 鹿大遺跡住居跡床面の遺物出土状況
左：住居跡 99-1-SK50，右：住居跡 99-1-SK15, 黄色矢印部分が脚台破片

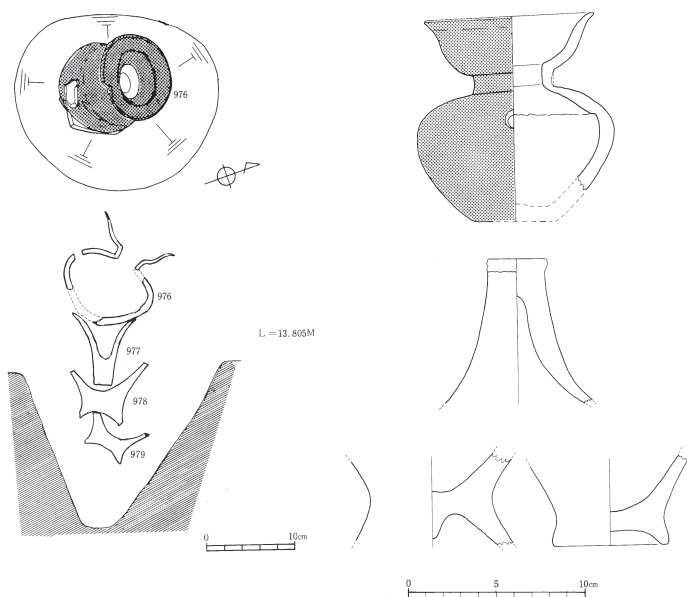


図4 萩原遺跡住居跡 柱穴内遺物出土状況と出土遺物
青崎（1980）より引用、一部筆者改変

構が確認されている（図4）。異なる2基の住居跡に伴うものではあるが、重ね方は全く同じである。一方は支柱穴内、一方は床面に積み上げていたと考えられることから、住居廃棄時によるものと推定できる。

大龍遺跡では、住居跡群隣接地に複数の土器片や軽石礫・埴を平面的に並べた遺構が確認されている（図5，出口他2001）。2、3個を1セットとした甕の脚台や壺口

縁部を対置させるなど、意図的な配置がうかがえる。大壺は胴部で分割され、上半部と下半部は離れて出土している。さらに、下半部のみ伏せられた別個体の大壺の中には軽石礫が詰められていた。これら土器片とおなじレベルに軽石礫や完形品の埴が配置されるなど、本遺跡は、これまで検出された同様の遺構の中では最も複雑な構成になっている。

これらの遺構に使用された土器片の形状に注目すると、以下の3つのグループに分類できる。（ア）甕の脚部や壺口縁部付近の筒状の破片、（イ）甕や鉢の脚台下半部や高坏脚部などの器台状を呈する破片、（ウ）上部と下部に分割された大壺片である。破片の選択や配置に全く同じパターンが認められるのは萩原遺跡の2つの遺構のみであるが、全体的には器種や部位にゆるやかな類似性が認められる。しかし、重ね方は遺跡ごとに異なる（図6）。ここで取り上げた遺構は、種類の異なる儀礼によるものである可能性も高いが、土器の使い方に集落間を横断した強い規制があったとは考えられない。木製品など他の素材の道具も組み合っていた可能性があるが、遺跡に残存した道具である土器を見ると、ゆるやかに類似するものの、並べ方が違うなど集落間で異なっており、遺構を形作る行為は、集落間では共有されていないものであったと考えられる。

② 完形品の飲用器

住居跡床面からは、完形品やそれに近い状況の埴や須恵器甕など飲用器がしばしば単独で出土する。上記①の土器片を組み合わせる例とは異なり、器としての機能を保持しており、墓域の供献品に見るような焼成後の胴部穿孔などもない。まれに、鹿児島市下大原遺跡や枕崎市奥木場遺跡住居址等のような、複数の埴が検出される事例も見受けられる（宮田・旭1987, 吉永・富田1988）。水や酒などの内容物を供えた容器として残された可能性が高い。

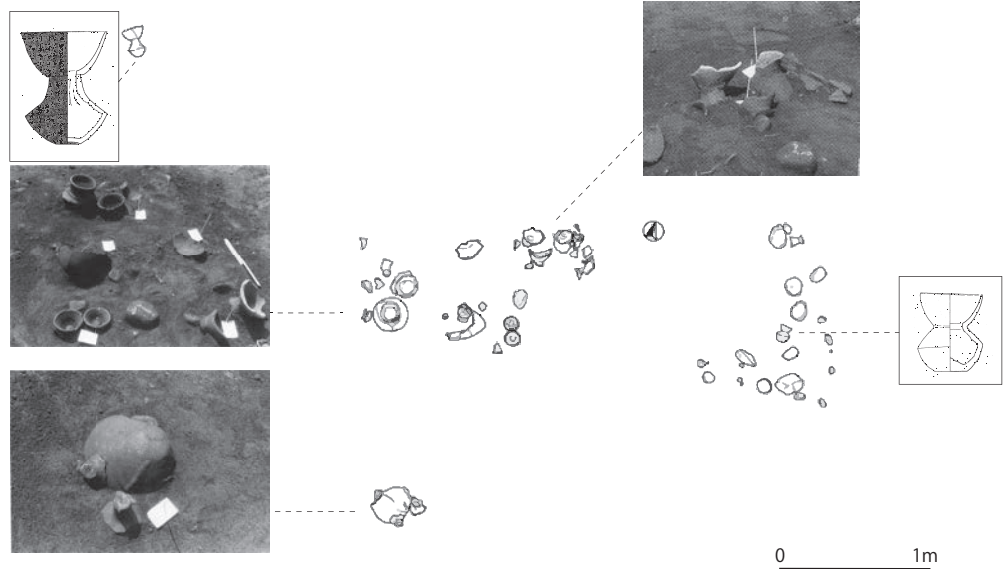


図5 大龍遺跡 土器片を配置した遺構
出口他（2001）より引用、一部筆者

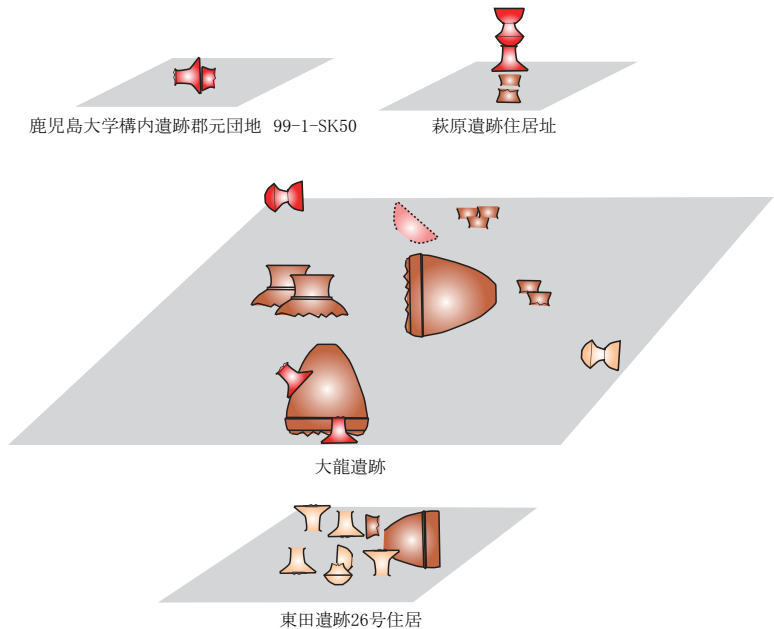


図6 各遺構の土器片の配置（笹貫式段階）



図7 川岸に埋められた土器（鹿大遺跡）

2 河川に伴う遺構

南九州では古墳時代に入ると遺跡数が増加する。特に平野部に立地する集落遺跡が増え、1遺跡内の建物軒数も増加する傾向にある。地形的には河岸段丘上か自然堤防帯に立地し、居住隣接地に河川跡が確認されている場合が多い。水田稲作など農耕に必要な水源として、また井戸が存在しない南九州古墳時代集落にとっては生活用水を得る場所として、さらに交通路として、河川は重要な場所であったと考えられる。

河川に関連する遺構としては、川岸で確認されるものと、河川埋土内から出土するものに分かれる。河川から出土するものとしては、鹿大遺跡（旧 釘田遺跡第8地点）（松永・坪根 1986）や鹿児島市不動寺遺跡などがあげられる。鹿大遺跡の河川埋土出土品には様々な器種が認められるが、壺や甕など飲用器の完形品が多く、壺は胴部に焼成後穿孔が施されているものがあること、また、ミニチュア土器も多く含まれることから、

河川祭祀に伴うものが多く含まれていると考えられている（鹿児島大学総合研究博物館 2001）。

川岸で確認されているものとしては、鹿大遺跡（鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2003）と始良市萩原遺跡（平田編 1980）があげられる。鹿大遺跡では、浅い土坑内に、東原式段階の甕が破碎された状態で埋められていたが、脚台部分は欠損していた（図7）。これは上述した鹿大遺跡住居跡 93-6-SK14 の事例と共通する。ただし、この遺構が検出された川岸は住居跡群が検出される居住域とは対岸にあたるため、居住に関するものとは区別する必要があるだろう。

萩原遺跡の場合は、土器片がまとまって川岸から検出されている。意図的な配置かは判然としないが、器種や部位をみると、分割された大壺1個と大壺下半部のみ1個、甕や台付き鉢の脚台部、高杯の脚部等で構成されており、1-①で述べた大龍遺跡で出土した土器片群の種類と類似する。

3 その他の祭祀遺構

遺構の種類が不明ながら、特殊な土器の出土状況が認められる事例として指宿市^{むこよし}向吉遺跡がある。東原式段階の遺構である。ここでは、軽石礫と土器埋納土壙を弧状に配置した遺構が検出されている（図8、渡部 1997）。土壙には、甕・台付鉢・小形高坏・大型鉢（あるいは蓋）・大型高坏の口縁部・軽石礫が埋納されていた。渡部（1997）による土器の埋納状況の復元から、これらは同時に埋められと考えられる。器種が煮沸道具と食器であることから、遺構近くで共食し、使用した道具を埋納した可能性も考えたい。

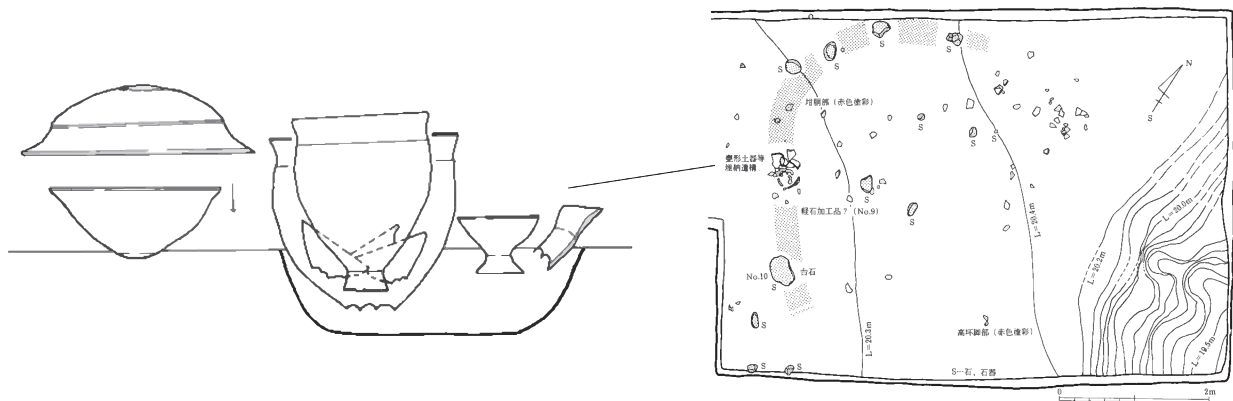


図8 向吉遺跡の土器埋納遺構
渡部（1997）より引用、一部筆者

4 ミニチュア土器と杓子形土製品 (図9)

南九州では、土器のミニチュア品が成川式土器の中に含まれている。ミニチュア土器の中には精製品と粗製品があるが、後者はサイズのわりに器壁が分厚く、ユビオサエ痕も明瞭に残したものが多くことから、「手捏ね土器」と呼称される場合もある。

杓子形土製品はほとんど粗製品であり、手捏ねで作られている。ミニチュア土器とともに南九州本土全域から出土する。そのモデルとなった木製品は杓などの掬い具であると想定される³⁾。これらの土製品は実用品としては小さいものが多く、使用に耐えないと推定されることから、ミニチュア土器と同様そのほとんどが祭祀用の道具であろうと考えられる。

出土状況を見ると、両者とも住居跡や溝状遺構、廃棄場と考えられる土器溜り遺構などから出土しており、居住に関連するものが多い。杓子形土製品が出土した外川江遺跡(鹿児島県教育委員会 1984)や本御内遺跡(富田・関 1994)では鏡片や小形紡製鏡も出土している。出土状況からの直接の関連性は不明だが、拠点集落から出土する傾向にあるという点では一致している。また、杓子形土製品の場合、宮崎県や熊本県では弥生時代後期～終末期に限定されるのに対し、鹿児島県側では弥生時代後期に出現し、在地化して古墳時代まで存続し、成川式土器の消長とほぼ連動している。

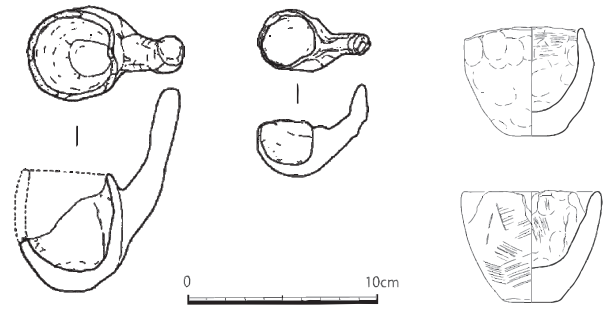


図9 杓子形土製品とミニチュア土器 S=1/4
杓子形土製品：外川江遺跡(鹿児島県教育委員会 1984より)、ミニチュア土器(寒川編 2011より)

5 まとめ

成川式土器を伴う祭祀的遺構と、土壌墓や土器棺墓などの墓域祭祀や供献品を比べると、大きな違いが認められる(図10)。墓域で出土する主要な器種は、大壺・壺・高杯・埴など、機能別に見ると貯蔵容器と食器であり、完形品かそれに近い残存状況である。ただし、壺には胴部に焼成後穿孔が施されているものが多く、貯蔵容器としては象徴的なあり方を示している。また、各器種の型式変化があるものの、使用される器種組成は古墳時代を通じてほとんど変化しない。

一方、集落遺跡での祭祀遺構から出土する土器は、東原式段階では脚台をはずした甕を用い、次の辻堂原式・

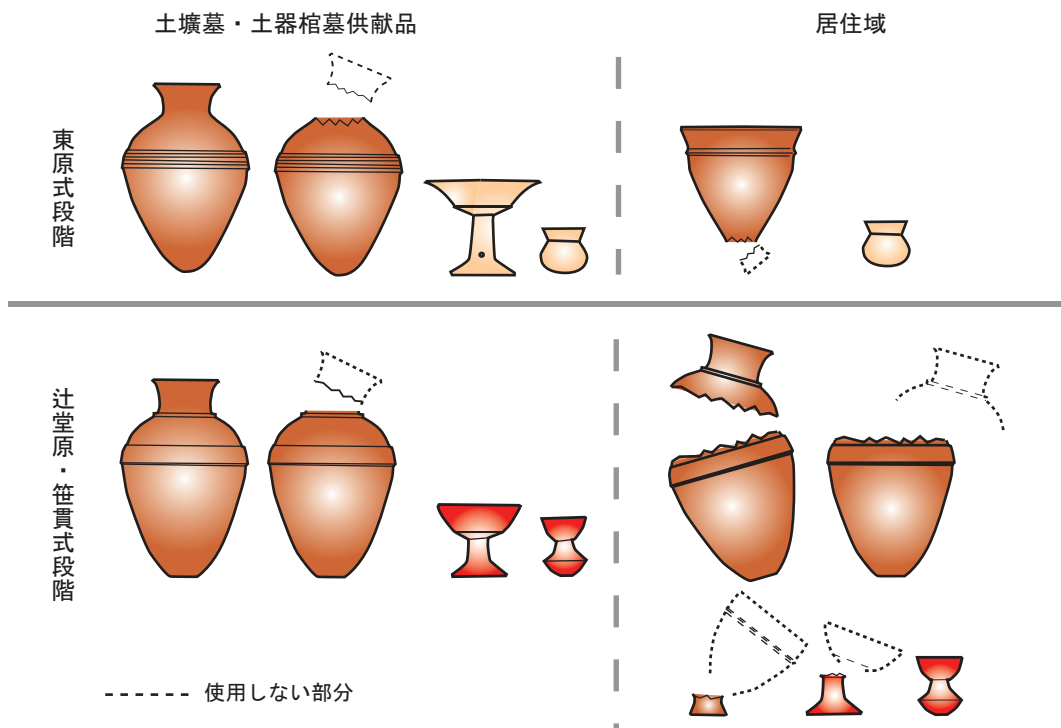


図10 集落遺跡検出の祭祀的遺構と墓域で使用する土器の比較

笹貫式段階のものは、大壺・甕の脚台・台付鉢の脚台・高杯の脚部・完形の埴などを組み合わせるもので、器種や部位に変化がみられる。煮沸具の使用・筒状の破片や器台状の破片・分割された大壺など、墓域でのあり方とは全く異なっている。

日常的な土器片で形成されるこれらの遺構は、ただの破片が転がっているように見えるかもしれない。しかし、このちょっと奇妙な遺構は、当時の人々の生活に密着した願いや祈りのためのアイテムであったと思われ、それは集落ごとに少しずつ異なったものであったようだ。

成川式土器は、調整具の違いや口縁端部の仕上げ方、器形の差などの製作技法の違いが遺跡ごとにみられ、細かい型式変化ごとに各遺跡間の並行関係をとることが困難な土器様式であるが、それは、土器作りを行う集落内で製作技術が変化する一方、他の集落との土器作りの情報交換があまり頻繁ではなかった事を示している。これは、ゆるやかに類似しながら遺跡ごとに少しずつ異なる祭祀的遺構の様相と共通するものである。土器作りと集落での祭祀的遺構は、それぞれ自立しながらゆるやかに連携していた、成川式土器を使用する人々の社会の様相を示しているのかもしれない。

註

- 1) 遺構名は「○号住居址」など報告書掲載の遺構名をそのまま用いるが、遺構種類名としては「住居跡」に統合する。
- 2) 以後、「鹿大遺跡」と略す。
- 3) 匙にしては身の部分を深く作り出しているものが多いことから、杓がモデルになっているのではないかと推定され、ここでは杓子形土製品と呼称する。

引用・参考文献

- 青崎和憲 1980「四段重ねの土器」『萩原遺跡Ⅱ』始良町教育委員会 .69-74.
- 青崎和憲 1996『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県教育委員会 1983『成川遺跡』鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会 1984『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県教育委員会
- 鹿児島大学総合研究博物館 2001『鹿児島大学総合研究博物館 News letter』No. 2
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2003『鹿児島大学構内遺跡郡元団地 H - 12・13 区（VBL 棟建設地）における発掘調査概要報告』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 佐々木幸男・出口浩・吉永正史・森岡久美子 2004『武遺跡 E 地点』鹿児島市教育委員会
- 寒川朋枝編 2011『鹿児島大学構内遺跡郡元団地一釘田第一地点』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
- 田中竜太・出口浩・森岡久美子 2004『武遺跡 F 地点』鹿児島市教育委員会
- 出口浩・吉永正史・中村直子・宮里諭子・上村律子 2001『大龍遺跡』鹿児島市教育委員会
- 戸崎勝彦・吉永正史 1981『松之尾遺跡』枕崎市教育委員会
- 富田逸郎・関明恵 1994『本御内遺跡（舞鶴城跡）』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター
- 中村直子 2001『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 15』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中村直子 2004「住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について—南九州古墳時代を中心として—」『鹿児島考古』第 38 号 鹿児島県考古学会
- 中村直子 2009「南九州における木製品模倣土器について」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集 pp.59-67
- 平田信芳（編）1980『萩原遺跡Ⅱ』始良町教育委員会
- 文化庁（編）1973『成川遺跡』文化庁
- 松永幸男・坪根伸也 1986『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 弥榮久志 2003『武 A・B・C 遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮田栄二・旭慶男 1987『奥木場遺跡』枕崎市教育委員会
- 吉永正史・富田逸郎 1988『梅木渡瀬調査地区』喜入町教育委員会.
- 渡部徹也 1997「鹿児島県指宿市向吉遺跡検出の祭祀遺構について—その成立背景と意義—」『人類史研究』9 221-234 頁